

木下富砂子「静岡県」

九十七歳の誕生日

九十七歳の誕生日を迎えた夫の笑顔は、優しく美しく明るい。何故なんだろう。酒なくては済まされなかった祝いの盃に、ほんのちょっと口をつけただけなのは何故なんだろう。ケーキなど見向きもしなかったのに、娘の切り分けたそれに箸をつけているのは何故なんだろう。ハッピーバースデーウーユーを歌う子や孫に、声を合わせているのは何故なんだろう。

数年前から認知症の薬を飲んでいます。サービス付き高齢者住宅に二人で住んでいます。この日は、遠くに住む息子や孫も顔を見せて、夫の笑顔は常にも増して輝いています。

宴が果て誰もがいなくなって、私は窓辺に立って夜空を眺めています。中空に白い三日月が出て、星が一つ光っています。幾光年を経て、地球に光が届くのだと聞いています。人が死んだらお星さまになるのだと、子供のころ聞いていました。四人の子に心を遺しながら逝った子等の父親は、どの星なのでしょう。

六十年前、私は彼の兄嫁でした。四人の子連れの私との結婚に、彼の親や兄弟が反対したのは当然です。険しく苦しい道のりでしたが、今も昔も、彼の笑顔は何時もいつも素敵なのです。彼って、夫です。

もそもそと起き出してきました。傍へ来るのかと思ったのですが、トイレに入っていました。用を済ませてベッドに戻ってしまいました。

「月がとっても青いから遠回りして帰ろ」

こんな歌が好きです。月の砂漠、荒城の月が大好きです。夫がハーモニカを吹いて私が歌って、そんな日がありました。夫は今、そんな日を忘れてしまって、今日のことも昨日のことも何もかも忘れてしまって、でも笑顔だけは忘れません。

きっと死が訪れるその日まで。いえ、笑顔のまま眠ったままで。何故って夫の笑顔は心の豊かさの証しですから。